

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

## 史料ネット News Letter

第58号 2009年6月30日(火)

発行：歴史資料ネットワーク



▲ シンポジウム「災害の記憶と伝承」の  
 ようす (2009年4月25日)



▲ 大学コンソーシアムひょうご神戸・フォーラム  
 のようす (2009年3月29日)

### 目次

巻頭言 史料ネット新体制発足の射程

板垣 貴志…2

2009年度

歴史資料ネットワーク総会の記録 …3

◆◇特集◇◇

シンポジウム 「災害の記憶と伝承」

中野 賢治…4

大学コンソーシアムひょうご・神戸フォーラム

「水害から歴史資料・書籍・写真をまも  
 る」フォーラム開催 河野 未央…7

新刊紹介『水損史料を救う』 …8

編集を終えて 松下 正和…9

【特別寄稿】

西宮冷蔵と古文書レスキュー

飯塚 修三…10

## 史料ネット新体制発足の射程

事務局長 板垣貴志

去る6月7日の総会により、前年度より着々と準備していた新体制が発足しました。いわゆる若手委員が主力となる新たな史料ネットの誕生です。

新体制の主力若手委員5人、板垣貴志（1978年生まれ、島根県出身）、中野賢治（1979年、長野県）、森脇崇文（1981年、岡山県）、川内淳史（1980年、青森県）、吉川圭太（1980年、福島県）は、阪神・淡路大震災時、中学2年生～高校1年生でいずれも被災地（10市10町）に駆けつける時間的経済的手段を持っていませんでした。つまり、“あの震災”の現場を知らない世代であり、そんな若手委員にとっては、「震災を風化させてはならない」という言葉は自己欺瞞的なものとなっていました。なぜ、どのように史料ネットに関わるのか、新たな方法論が必要とされ、前年度より模索を続けてきました。

この史料ネット News Letter の表紙の上に掲げられた「歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ」という宣言文は、初期メンバーの方々が、活動を通して見出した問題意識が集約されているように思います。初期史料ネットが掲げた、“普遍的課題”こそ、活動を震災後の一時的なものにとどめず、今日まで継続する源泉となったに違いありません。この“普遍的課題”の発展的継承を若手委員は意識しています。では、“普遍的課題”とは何か。「それはアーキビストや研究者が、「参加型社会」の構築あるいは市民自治の実現にどう貢献するのかという問題意識に関わる課題」であると説明されています（『歴史資料ネットワーク活動報告書』2003、P3、馬場義弘氏執筆）。いまの歴史学が現実社会と結び結ぶべきネットワーク構築の模索と、その可能性の追求でしょう。歴史研究は、市民の主体的な社会参加を根底で支えるものにならねばなりません。

以上のような“普遍的課題”を模索しながら、前年度、若手委員は“報道”（2008年12月7日）と“伝承”（2009年4月25日）に着目したシンポジウムを開催しました。これは、自分達の阪神・淡路大震災像は震災報道によって形成されていることや、体験していない災害をいかに伝承するのかを明確に意識化する試みでした。これら新たな史料ネットの成果は、なんらかの形で社会や歴史学界に発信していく予定です。

戦後の民主的な歴史学が展開してきた様々な科学運動は、形骸化が進み行き詰まりを見せています。近年の歴史学界では、昨今猛威をふるう新自由主義に対する批判が華々しく展開されていますが、学会での抽象論を聞いている若手研究者のなかで、日々の研究生活で実践している人はどれだけいるのでしょうか。私自身を含め甚だ心許ない気がします。人文研究にすら競争が強要され短期的な成果物しか出せない状況や、なにより雇用環境の悪化による若手の貧困化が進行する状況で、余裕もなくなり科学運動どころではありません。歴史研究が個別細分化したりたこつぼ化する元凶は、若手を取り

巻く研究環境の悪化と無縁ではないように思います。そのような状況でもなお史料ネットに集う若手委員は、現実社会との接点を模索する意義を確信し、史料ネットを“修練の場”と捉えています。

新体制の発足により、史料ネットも新たな海に乗り出すべく新しい水夫に舵取りが任されたわけです。今後とも会員の皆さまの変わらぬご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(いたがき・たかし／歴史資料ネットワーク事務局長)

## ●2009 年度 歴史資料ネットワーク総会の記録

(文責：森脇崇文)

歴史資料ネットワークの2009年度総会が、2009年6月7日に西宮市北口町 ACTA 西宮東館6Fの西宮市大学交流センターにおいておこなわれた。奥村弘代表の開会の辞の後、議長として関山麻衣子氏、書記として中野賢治氏がそれぞれ選出された。さらに続いて、議長により個人会員数が140名、出席会員数が15名、議決権行使者数が15名、委任状提出者数が47名であることが報告された。

次いで、議案の審議に入った。第一号議案は、松下正和氏より2008年度の活動報告として、(1)被災史料の整理や被災地での調査活動、(2)市民や自治体との連携を重視した地域史研究や地域遺産保存・活用の取り組み、(3)震災記録保存と文化財防災、(4)災害対策、(5)組織と運営の五項目が提示された。それぞれの主たる報告内容としては、(1)では2004年台風23号の被災史料である田尻早苗家文書の調査進捗状況など、(2)では市民講座や若手企画、地域史卒論報告会などの内容と実績、(3)では各大学・行政機関での水損史料ワークショップの実施状況など、(4)では2008年6月に発生した岩手・宮城内陸地震への宮城資料ネットを通じたカンパ活動の結果など、(5)ではメールニュースや今年度より開設されたブログの現状報告などが挙げられる。

続いて、人見佐知子氏より第二号議案である2008年度決算報告がおこなわれ、それを受けて木村修二会計監査委員より第三号議案である監査報告がなされた。会計状況に関しては会費納入状況の悪化が深刻な問題として取り上げられ、この点については会計監査委員からも来年度以降の改善策を求められた。これらの議案については、いずれも質疑応答を経た上で、出席者の議決によって承認された。その後、板垣貴志氏より第四号議案として2009年度活動方針、人見佐知子氏より第五号議案として2009年度予算案が提示された。活動方針としては、概ね前年度のものを継承し、積み残しの被災文書の調査・整理・返却に取り組んでいくこと、市民講座などのイベントを企画していくこと、水損資料ワークショップを積極的に展開することなどが挙げられたが、ニュースレターの紙面充実やホームページ・ブログの更新による情報発信の強化という目標が掲げられたことは特筆すべきと思われる。

最後に、第六号議案として2009年度運営委員の選出がおこなわれた。事務局長に就任する板垣貴志氏以下、各運営委員による自己紹介の後、奥村弘代表による閉会の辞をもって、総会は無事終了した。

(※総会の議決録は別刷りで同封していますのでご参照ください)

(もりわき・たかふみ／歴史資料ネットワーク副事務局長)

## シンポジウム「災害の記憶と伝承」

中野 賢治



2009年4月25日、神戸市立新長田勤労市民センター別館・ピフレホールにおいて、シンポジウム「災害の記憶と伝承」が開催された。開催趣旨は、阪神・淡路大震災からまもなく15年という時間のなかで、震災も記憶され、次世代に継承されるべきものに性格が変わりつつある、という視点から、いかに災害の記憶を次世代に伝え、共有するかを考える、というものであった。

まず信州大学教授の笹本正治氏から、「伝承を防災に活かすー天竜川上流域災害教訓伝承手法についてー」という報告があった。笹本氏は、長野県の天竜川上流域に残る歴史資料や遺構、そして民間伝承に着目し、その活用のための取り組みを紹介されたうえで、伝承が伝わっていることの意味を考えて、伝承に景観や遺物との物語的な関連をもたせ、そこに気づかれていない大事な災害を読み取れるように、防災の意識を育てるような取り組みが必要だ、とされた。

ついで神戸大学都市安全研究センター学術推進研究員の相澤亮太郎氏から、「記憶の場所としての災害モニュメントー何が伝わり、何が伝わらないのかー」と題した報告があった。相澤氏は、阪神・淡路大震災を中心に、地域に残る震災の記憶としてのモニュメントへの人々の関わり方を紹介し、いかなる「震災の記憶」を伝えていこうとするのか、そして場所にまつわる記憶の伝承を、防災や教訓だけに限定してしまうことの危険性を指摘された。

その後、質疑応答が行われた。論点はいくつか挙げられたが、そのなかに震災を記憶として語っていこうとするとき、そこで強調される防災意識と、一方で震災で亡くなった故人やその遺族の持つ震災への思いとが、どのように接点を持つべきかという趣旨の質問があった。それは、相澤氏が報告のなかで紹介された、「うちのお母ちゃんは防災のために死んだんやない」という声をどう受けとめるかということになるが、それに対して、笹本氏が、時が経たないと語れないものもあれば、時が経つと語れないこともある、しかしいずれ語らなければなら



ないときがくるのだから、そのためにできることはしておくべきではないか、と応じていたのが印象的だった。

雨天だったこともあり、参加者は決して多くはなかったものの、内容は非常に充実していたといつてよいだろう。前にニューズレターの「巻頭言」にも書かせてもらったように、私には阪神・淡路大震災の直接的な記憶はない。史料ネットを通じて、防災について考えるなかで、果たして本当に自分に災害や防災を語ることができるのか（許されるのか）という迷いがあった。しかし、今回のお二方のお話を聞いて、素直に震災の記憶を受けとめて、自分なりの震災文化を伝えていくことが大切であると、背中を押されたような気がした。

最後になるが、ぶしつけな依頼にもかかわらず、報告を快諾して頂いたお二方と、来場頂いた参加者のみなさまに、企画者として、お礼を申し上げたい。

(なかの・けんじ／歴史資料ネットワーク副事務局長)

#### ■ アンケートの感想から

- ・ 経験したかしていないかは関係なく、いろんな記憶・経験の中で何を伝えていくべきか、その選別の重要さ、難しさを知った。
- ・ 経験者と非経験者ということは、今日まで背負ってきたことですが、今後もやはり考えつづけていこうと思いました。
- ・ 新聞紙上で住所が詳しくなかったのに到着に苦労して遅れてしまいました。
- ・ 文献史学では一次的な古文書に注目が集まり、ともすれば、伝承は軽視されるが、なぜ「伝承」が伝承されるのか、改めて気づかされることが多かった。
- ・ 質問もあったのですが、時間がなかった。

#### ● 会員のこえ

- ・ ネットでみなから参加したいと思いながら実現できていません。
- ・ 終身会費制度、会費の自動引き落とし制度もご検討下さい。事務の大幅な合理化ができるはず※。
- ・ 西宮での開催ということでは是非出席したかったのですが、地域の仕事と重なり出席できず残念です。ご盛会をお祈り申し上げます。
- ・ 『水損史料を救う』をいただき、有難うございます。失敗をおそれぬ行動に敬意を表します。但馬のことで協力ができればと思います。
- ・ 前回の廣川和花さんの論考はとても刺激的でした。

※ご意見ありがとうございます。終身会費制度の導入については現在運営委員会で協議中です。会費の自動引き落としは、会員が300名前後の現在では手数料の負担が大きく（1000人以上規模でないと採算がとれない）、導入は不可能との結論にいたりました。会費の納入方法については、郵便局以外に、銀行振込での会費納入の方法を検討中です。

**大学コンソーシアムひょうご神戸 社会連携事業**  
**「水害で水損した歴史資料の保全・修復ができるボランティアの養成事業」**  
**「水害から歴史資料・書籍・写真をまもる」フォーラム開催**

河野 未央

2007年度より引き続き、史料ネットでは、神戸大学・神戸女子大学・大手前大学（2008年度以降は甲南大学・関西学院大学が参加）で取り組んでいる大学コンソーシアムひょうご神戸の社会連携事業・「水害で水損した歴史資料の保全・修復ができるボランティアの養成事業」において、技術協力をを行い、各大学において水損史料ワークショップを実施してきた。

さらにコンソーシアムでは、2008年度における活動総括として、2009年3月29日に「水害から歴史資料・書籍・写真をまもる」と題したフォーラムが実施された。当日の内容は下記の通りである。

**主催：兵庫県内5大学文化財系連合**

（神戸大学・関西学院大学・甲南大学・神戸女子大学・大手前大学）

**共催：大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター**

**日時：2009年3月29日（日） ワークショップ 10：00～**

**フォーラム 13：30～**

**会場：深江会館（神戸市東灘区深江本町）**

**内容：**

**【第1部】10:00～12:00 水損歴史資料ワークショップ**

（水損史料の応急的救出法についての講義・実習）

**【見学】 13:00～13:25 神戸深江生活文化史料館見学**

**【第2部】13:30～17:00 フォーラム**

**「水没した館蔵資料・書籍・写真の救出と保全—平成16年福井豪雨の教訓—」**

水野和雄氏（福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館）

「福井豪雨災害とその復旧から学んだこと

～特別史跡・特別名勝一乗谷朝倉氏遺跡の場合～」

川瀬敏雄氏（株式会社堀内カラーアーカイブサポートセンター）

「水害被災写真原版の救済について」

討論（司会：坂江渉氏／神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）

当日は、午前・午後あわせて30名ほどの方が参加された。第1部の水損史料修復ワークショップは、講師として史料ネットから河野が参加した。今回のワークショップでは、より身近にあるものが水損する、という場合を想定し、書籍や写真など現代資料についても水損させて、ペーパータオルによる吸水乾燥を行った。現代資料の処置を行うという試みは、実は今回が初めてであった。そのため

ワークショップは「実験」としての意味合いも強かったが、実際に修復措置を行ってみたところ、書籍については乾燥段階でよれや歪みが生じるため、和紙を乾燥させるよりも技術的に難しくなることがわかった。

なお、第1部は、自治体の文化財担当職員をはじめ、史料修復の専門家など様々な立場の方が参加されていた。それゆえ、参加者の方から数多くの助言を寄せていただくことができた。これまで様々な場所で水損史料修復ワークショップを開催し、講師



を担当してきたものの、私自身史料修復に関しては「素人」であり、その点の負い目や引け目がいつもあった。今回は専門家の方々にご参加いただけたことは、たいへん心強かったし、おそらく他の参加者にとっても益するところは大きかったであろう。今後も様々な立場の方々とこのような技術交流を図るために、積極的にそうした場を作っていければと思う。

第2部のフォーラムでは、福井水害の被害状況とともに、写真原版が水損した場合の处置方法をご報告いただいた。水野氏のご報告では、福井県の文化財については、被災する以前に国・県・市という行政の間での役割分担が構築されていたため、保全活動がスムーズに行われたということが紹介されていた。様々なレベルにおいて、日常時から連携をとることの重要性を改めて感じた報告であった。

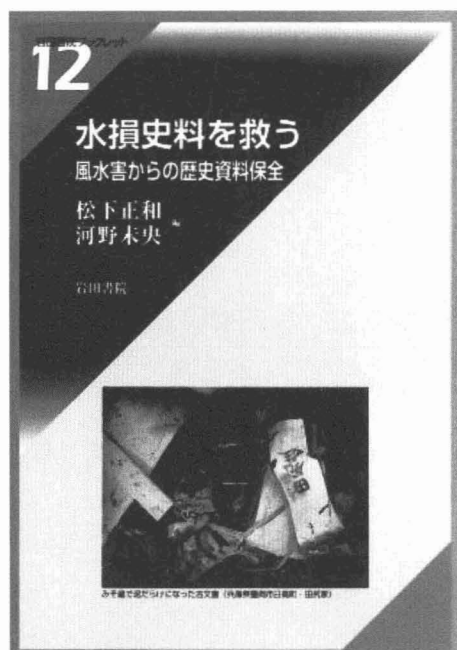
川瀬氏からは水損した写真原版の修復方法に関する報告をいただいた。写真原版は水に対して非常にデリケートであるため、「水に濡れる前に予防することが重要」と繰り返し説かれていたことが印象的であった。

マイクロフィルム等も写真原版と同様で、「濡れたら最後」と考え、「とにかく予防を」とのことであった。通常であれば500年単位での保存が可能（ただし、年数は予測値）ということで、史料画像をマイクロフィルムで保管している史資料館・文書館等史料保管施設は多い。しかし、そのマイクロフィルムも写真原版と同様の弱さを持つということをお聞きし、衝撃を受けた。その後の討論でも、参加者から同じような感想が寄せられていた。

討論では、私の方からも今後、万一水損した写真原版を救出することになったことを想定し、素人でできる範囲での处置方法を川瀬氏に質問してみた。川瀬氏によれば、写真原版は、万一濡れてしまった場合は、専門家に渡す前にとにかく乾燥させることが重要とのことであった。また、写真（プリントアウトしたもの）については、ペーパータオルなどで水分を拭き取ることはせずに、直射日光のあたらない風通しのよい場所に洗濯バサミなどで吊るしておくのが一番よいとのことであった。

討論では他にも多くの質問や感想が寄せられ、参加者の熱気がひしひしと伝わってきた。たいへん有意義な会となったと思う。今後とも引き続きこのような場が持てることを切に願う。

(この・みお／歴史資料ネットワーク運営委員)



## 水損史料を救う

### 風水害からの歴史資料保全

岩田書院ブックレット アーカイブズ系⑫

松下正和・河野未央編

2009年5月刊

A5判・156頁・並製本

ISBN978-4-87294-564-5 C1321

1600円(税別)

#### 【主要目次】

歴史資料ネットワークによる新たな災害対応

—水損史料保全活動の取組—

松下 正和・河野 未央

第Ⅰ部 風水害で被災した歴史資料の救出活動をめぐって

—活動とその後の展開—

第1章 兵庫県内 2004年台風23号被災歴史資料保全および修復活動

河野 未央

第2章 京都府内 2004年台風23号被災歴史資料保全活動

河野 未央・木村 修二

第3章 水損史料修復ワークショップ

河野 未央・松下 正和

第4章 史料ネットにおける「ボランティア」再考

加藤 宏文

第Ⅱ部 シンポジウム記録「風水害から歴史資料を守る」

福井史料ネットワークの活動

多仁 照廣

台風23号による被災資料調査・レスキュー活動

木村 修二

台風23号による水損資料の修復

河野 未央

コメント

前田 喜一・小寺 誠・加藤 晃・吉岡 博之

討論

水損史料保全活動をめぐる現状と課題

松下 正和

# ブックレット『水損史料を救う 風水害からの歴史資料保全』

編集を終えて

松下 正和

2004年10月に発生した台風23号は、多くの人的被害と住宅被害をもたらしただけではなく、歴史資料・文化財に対しても多くの水損被害をあたえました。本書は、歴史資料ネットワークが被災地の文化財担当部局や地域史研究団体・住民と協力しておこなった、水損史料の保全・救出活動記録です。

第Ⅰ部「風水害で被災した歴史資料の救出活動」では、兵庫県内・京都府内でおこなった歴史資料保全修復活動（河野・松下・木村修二）、水損史料を保全できる「救命士」を育てるための水損史料修復ワークショップ活動（河野）を紹介しています。また加藤宏文さんには、史料ネットのボランティア論をお寄せいただきました。第Ⅱ部は、2005年6月の史料ネットシンポジウムの記録です。

1995年1月の阪神・淡路大震災後の被災歴史資料保全活動を契機として設立され、地震史料の救出を主におこなってきた歴史資料ネットワークにとって、2004年の新潟水害・福井水害にはじまる風水害への対応は、新たな画期となる出来事でした。

大規模な風水害の場合、汚水で水損した紙史料は、高温の中ですぐにカビが繁殖し、腐敗が始まります。浸水被害にあった家屋では、ゴミ出しや蔵の解体時に、保全不可能と判断された紙史料は、地震による被災史料よりも早く廃棄されてしまう可能性が高くなります。「早期の被災地入りは住民感情を刺激する。しかし被災地入りが遅れると史料の腐敗や廃棄が進行する…」このようなジレンマの中、私や執筆者の木村さん・加藤さんを中心とした被災地班メンバーは、兵庫県・京都府内の被災自治体8市10町を訪問し、地震とは異なる水害被災地での活動に取り組みました。地元の協力を得ながら、段ボール換

算で40箱を越える、地域の歩みを示す貴重な歴史資料を救出しました。河野さんをボランティアリーダーとした乾燥作業班は、のべ200名近くの参加を得て、濡れた史料にキッチンタオルを挟み込みながら手作業で丁寧に乾燥してくださいました。私たち被災地班メンバーが水損史料を救出するたびに、廃棄前にレスキューできた喜びとともに、乾燥作業班のメンバーにさらなる負担がかかることを考えると、とても複雑な気分だったのを思い出します。それでも水損にともなう史料の劣化は抑えがたく、冷凍保管庫の確保に奔走していたところ、西宮冷蔵(株)さんが無償で保管スペースを提供してくださいました。その間に、私は兵庫県教育委員会文化財室に真空凍結乾燥の斡旋依頼をし、滋賀県立安土城考古博物館による真空凍結乾燥が実現したのでした。その後、所蔵者への返却・史料保存機関への寄贈をおこなうことができました。

大規模災害時に、多くのボランティアを組織し、水損史料を救出・返却する活動はおそらく日本では初めての経験だったと思います。それだけに、試行錯誤を繰り返しつつ水損時の史料保全の方法を現場で開拓していくことになりましたが、巡回調査や乾燥作業に協力してくださった皆様のご助力と励ましによって活動を続けることができました。本書には、水損史料救出のノウハウとともに、生活復興や史料救出への熱い想いが込められています。是非とも本書をご活用いただき、被災時の地域資料保全活動をより一層展開させるために、みなさまからの忌憚のないご批判、ご意見を賜れば幸いです。

(まつした・まさかず／

歴史資料ネットワーク副代表)

# 西宮冷蔵と古文書レスキュー

飯塚 修三

「陰徳あれば陽報あり」という浪速商人の心意気があります。英語でいえば「ノブレス・オブリージュ (Nobles Oblige)」でしょうか。

大阪には民間の寄付で建てられた施設がいくつもあります。1931年、大阪市民8万人の寄付金150万円（現在の750億円）によって大阪城天守閣が266年ぶりに再建されました。筆頭大口寄付者は住友吉左衛門の25万円、筆頭小口寄付者は子供たちのおやつ代を貯めた5銭でした。まさに浪速のシンボルです。

住友吉左衛門はそのほか、1900年に大阪府立中之島図書館建設に20万円を寄付しました。また1919年、天王寺茶臼山本邸を大阪市立美術館の用地として市に差し出しました。

今回は西宮でお金持ちが寄付したという話ではありません。いやむしろ、お金よりも大事な心を西宮市民に届けてくれました。この話は私が報告しなければ、埋もれて世に出なかったかもしれません。感動された方は口コミかこのコピーで多くの人々にお知らせになって下さい。

2004年10月20日、台風23号が土佐清水市に上陸し、21日にかけて近畿北陸地方を縦断しました。水害は宮崎県から富山県に及び、特に兵庫県、京都府を中心として死者95人、全半壊8,657棟、床上床下浸水55,558棟の被害がでました。京都府の由良川が氾濫して、観光バスの車体の上に避難した乗客の映像を覚えておられるでしょう。この水害の直後より歴史資料ネットワークの古文書救出活動が始まりました。

歴史資料ネットワークとは1995年1月17日、阪神・淡路大地震の直後に歴史資料救出のために設立されました。

2月4日、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会、日本史研究会、神戸大学史学研究会の各代表が尼崎市立地域研究史料館に集まり、「阪神大震災対策歴史学会連絡会」として歴史資料救出活動が始まりました。その後、ボランティア組織から、「歴史資料ネットワーク（略称史料ネット）」会員制組織に移行されました。事務局は神戸大学文学部にあり、代表は奥村弘文学部教授です。私も昨年まではサポーターでしたが、今年より正式会員（年会費5,000円）に入会しました。

10月24日、台風通過の2日後より、歴史資料ネットワークによる被災資料救出活動は始まりました。活動はまず、自治体、郷土史団体、支援団体とのネットワーク作りでした。当日、豊岡市立図書館を訪問して文化財の目録を手に入れます。次に但馬史研究会の協力を得て指定文化財保有の家々を訪ねました。

被災宅を訪ねるのは難しいタイミングがあります。早すぎると「叱られ」、遅すぎると「破棄されます」。

水に浸かった水損資料はすぐに救出作業にかかります。ペーパータオルを一枚ずつページごとに挟み込み、重石を載せて吸水させます。この作業を数回繰り返します。その後、エタノールを噴霧し、ビニール袋に密閉して防カビ処置を行いました。

しかし、古文書が泥まみれになり、ページが剥がれなくなった場合はこの方法では対処できません。凍結乾燥が必要となります。

凍結乾燥（フリーズドライ）は凍結したまま、真空中で水分子を固体から気体に変える「昇華」を利用します。タンパク質を変性することなく、色や香り、ビタミンを保持するので食品に利用されています。たとえば、ネギ、コーン、イチゴなどスーパーマーケットの冷凍売り場で見かける商品です。

凍結乾燥は一度に大量にできるわけではありません。カビ発生防止のため凍結保管が必要になります。歴史資料ネットワーク事務局長の松下正和さんは保管先を探すため電話をしました。

神戸、灘と保管倉庫をあたりましたが、「一見さんおことわり」と、正月商品で倉庫が一杯と断り続けられました。そして、最後に行き着いたのが西宮冷蔵です。「よしや、うちはあの騒ぎで倉庫が空いているので、つかってもええで」と水谷洋一社長の声が電話から聞こえてきました。西宮市民にとって「あの騒ぎ」を知らない人はいませんので今回は述べません。

12月7日、日高町と出石町のダンボール42個分の古文書が西宮冷蔵に運び込まれました。そして2005年3月24日、凍結乾燥機保有施設（安土城考古博物館）へ資料が搬出されました。この3ヶ月半の間、水谷社長は無償で冷凍倉庫を貸してくださいました。

2009年1月6日、JR西宮駅前で講演のビラを配っている水谷社長と偶然お会いしました。私が長い間、この話を漫筆にしようと願っていたことを社長に伝えました。

私は、2005年6月18日、尼崎市小田公民館において催された「歴史資料ネットワーク 風水害から資料を守る」シンポジウムに出席しました。そこで西宮冷蔵が無償で古文書を保管した話を初めて聞きました。漫筆を書き始めた時、正確をきすため、事務局長の松下正和さんに連絡しました。「その話なら、私が当事者だ」といって資料を送って頂きました。

2008年7月30日、NHKドラマ「たったひとりの反乱」でもこの話は紹介されませんでした。これこそが芸術文化活動を支援するメセナです。水谷洋一社長の「陰徳」を顕彰するため、この話を紹介しました。

「当たり前のことをしただけなのに、えらい大そうに」という水谷社長の声が聞こえてきそうです。

#### 参考文献

1. 松下正和「被災文書資料保全活動と平時における防災対策について」帝京大学山梨文化財研究所報告 49号、2005年
2. 松下正和「歴史資料ネットワークによる被災史料救出活動について」日本史研究、513号、2005年
3. 河野未央「台風23号による水損資料の修復について」歴史資料ネットワークシンポジウム、2005年6月18日、尼崎市小田公民館

（※西宮市医師会誌「談話室」465号、2009年4月号より転載）

（いづか・しゅうぞう／いづか眼科）

# 「宮城資料ネットワークの被災史料保全方法」 シンポジウム（ワークショップ）のご案内

日時：2009年7月27日（月）14時～

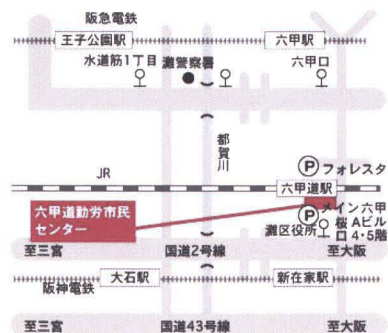
場所：六甲道勤労市民センター 会議室C

（神戸市灘区深田町4丁目1番39号 メイン六甲Aビル 5階）

電話078-841-1711、JR神戸線・六甲道駅南接

主催：歴史資料ネットワーク

共催：大阪歴史科学協議会、大規模災害時の史料保全論科研



## 「宮城資料ネットワークの被災史料保全方法」

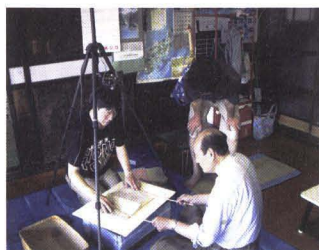
- ・ 講演：佐藤大介氏 （東北大学教育研究支援者・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局）
- ・ 実演：宮城資料ネットワークメンバー



宮城歴史資料保全ネットワーク（略称：宮城資料ネット）は、2003年7月26日に発生した宮城県北部地震によって被害を受けた歴史資料・文化財の救済・保全活動を契機として設立されました。現在も、宮城県内の歴史研究者や大学院生・文化財行政に関わる自治体職員などを中心に、被災地域における史料調査など、精力的に活動を展開されています。

そこで、史料ネットでは、宮城資料ネットのメンバーをお招きし、サンプル史料を使った撮影・記録・救出の具体的な被災史料の調査方法を実演していただきながら、被災史料の保全方法についての技術に関するワークショップ・意見交流会を開催することとなりました。

被災地域における状況調査や保全に関する技術は、通常であれば被災現場でしか体験することができません。このワークショップにより保全方法の技術がより普及することを願っています。被災史料の保全活動に興味がありながらこれまで参加する機会がなかった方々も含めて多くのご参加をお待ちしております。



【お申し込み方法】下記史料ネット事務局まで、住所・氏名・電話番号ないしメールアドレスを明記の上、はがき・FAX・メールのいずれかでお申し込みください。※会場が狭いので30人限定とします。

### 編集後記



インフルエンザ騒動がおさまってようやく一安心といったところでしょうか。インフルエンザで延期となっていました宮城資料ネットとのワークショップ・技術交流会を改めて開催することとなりました。皆様のご参加をお待ちしています。

今号も会員の飯塚修三様から特別寄稿をいただきました。ご味読ください。飯塚様は、史料ネットの情報を、たびたび医師会会報に提供してくださっているそうです。史料ネットの活動を支えて下さる会員の努力には感謝に耐えません。（ひ）

史料ネット NEWS LETTER No.58 2009年6月30日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565（開室時間 平日の午後1時～5時）

URL: <http://www.litkobe-uac.jp/~maochan/> e-mail: [s-net@litkobe-uac.jp](mailto:s-net@litkobe-uac.jp)